

## シリーズ

# 「ある監督官の問わず語り」(第 5 回)

## —仁和寺の法師—

労働安全衛生に携わる方々であれば、時には、多くの人を前にした安全講話をすることがあるだろう。

筆者も、安全衛生部署にいたことからその機会が多くあったのだが、その際の鉄板ネタに「徒然草」からの引用があった。

徒然草は、吉田兼好(兼好法師)が 14 世紀ごろに書いたとされる随筆である。「つれづれなるまゝに、日ぐらし硯に向かひて……」冒頭のこの一節は国語でも学ぶので、暗唱できる方もいるだろう。日々のちょっとした出来事から、感銘を受けたこと、社会への皮肉まで多岐にわたる内容を綴った、いわゆる「エッセイ」のはしりだ。

特に有名な段に、「石清水八幡宮の話」がある。

第 52 段：仁和寺にいたある法師が、年を取るまで石清水八幡宮にお参りしたことがないのを情けなく思い、あるとき思い立ち、徒歩でひとりお参りに行った。山麓の極楽寺と高良神社に詣で、八幡宮へのお参りはこれだけだと思い帰途に就いた。帰った後、彼は言った。「念願をようやく果たせた。聞いていた以上に尊い場所だったよ。ところで、他の参詣者がみんな山に登って行ったが、何かあったのかね? お参りすることが目的なので、私は登らなかったが……」

段は「すこしのことにも、先達(指導者)はあらまほしき事なり」と結ぶ。700 年前に書かれたものだが、今読んでも色褪せず、現代にも通じる普遍性がある。

安全衛生に関しても興味深い段がある。知っている人は知っているネタなので「今さらか」と思われるかもしれないが、二つばかりご紹介したい。

第 109 段：高名な木登りの名人が、職人に指図して高い木の上で枝切りをさせていた。職人がとても危ないように見える木の上にいるときは何も言わなかったが、作業を終えて木から降り、家の屋根ばかりの高さになったとき、「過って落ちるな、注意して降りろ」と言葉をかけた。雇い主が「それくらいの高さなら、飛び降りることもできるのに、なぜそこで声をかけるのか」と聞いたところ、木登りの名人は、こう答えた。「目がまわるほど高い危ない枝の上では、自分で落ちるのを恐れますから、注意しなくても良いのです。

過って落ちるのは、いつも安心できる高さになってからなのです」身分の低い下賤の者だが、聖人の戒めに適った考え方である。蹴鞠でも、難しいところを蹴りだした後、安心してると必ず失敗して落としてしまうものなのだ。

仕事は最後まで気を抜いてはいけないという教えだ。事故とは、どういうときに起こるものなのか、日々の戒めとしても非常にわかりやすい。

また、こういうものもある。

第 186 段：吉田という馬乗りが、馬乗りの秘訣について、こう語ったそうだ。「どの馬も手強く、人間の力ではまず張り合うことができないことを忘れてはいけない。だから、馬に乗るときは、まずはよく観察して(馬の)長所と、短所とを知るのがよろしい。次に、くつわや鞍などの馬具に、心配なことがあるだろうかと点検し、何か気にかかることがあるならば、その馬を走らせない。よい馬乗りというものは、こういった心遣いを忘れない。そして、これこそが馬乗りの秘訣である」

危険な機械を扱うにはどうしたらよいか、その心得である。

冒頭に戻すが、仁和寺の話も、実は安全衛生講話に活用できる。仁和寺の法師と同じく、仕事の現場にも先達(指導者)が必要だということだ。何も教えなければ、新入りの作業者は何をしていいかわからず、大事なことを失念してしまうだろう。これをお読みの皆さんが、彼らのよき先達となって、安全衛生とは何かをしっかりと教えることが肝要だ。

ところで、仁和寺に関しては、最近ひとつニュースがあった。宿坊の元料理長が長時間労働でうつになったことにより労働基準監督署から労災認定を受け、最終的には裁判となり、裁判所から多額の賠償金を支払うよう命令を受けた、というものだ。よくよく聞けば、仕事は 1 年間の休日が 10 日にも満たないほど過重であり、まさしく典型的な「過重労働事件」であったといえる。

八幡宮にお参りし損ねた法師がいた仁和寺である。きっと、労務管理に関するよきアドバイザーもいなかったのだろう。まさしく「先達はあらまほしき事なり」だ。